



失われていくものと残したいもの

(アラスカ・エスキモー) [3]

田村幸誠 Tamura Yukishige (滋賀大学)

this と that が 30 個!?

エスキモー語は、単語の形成の仕方が非常に生産的で、かなり複雑な内容まで 1 つの単語で表現できることが、その特徴としてよく知られている。例えば、ikamarpalinrituq という 1 つの単語で、「彼は大きなソリを作っているのではない」という意味が伝えられる。複統合的と呼ばれるこの特徴は、どこまでが単語で、どこからが文かということについて、ヨーロッパ言語の視点から見た基準を揺るがし、言語学者を悩ませてきた。

もう 1 つあまり知られていない特徴として、エスキモー語は、世界でも稀な、非常に複雑な指示詞の体系を有していることがあげられる。例えば、Look at that! に相当するエスキモー語の文で、that に相当する指示代名詞には、話者が首を上に向けて言う場合 (pikna)、下げて言う場合 (ugna)、そのままの場合 (ikna) と、場面に応じてそれぞれ違う単語が用いられる。また、首の向きが同じでも、対象物が静止しているか、動いているか、遠いか、近いかによっても指示代名詞が使い分けられる。例えば、上の方にあるものを指す場合だけでも、pagna, pikna, pakemna, paugna, pingna, pamna と最低 6 種類の区別を行う。基本的な形だけで 30 種類、それに単数・複数・双数の区別、格の区別がそれぞれ加わり、すぐには数えきれないほどの指示代名詞が存在するのだ。驚くべきことに、エスキモー語の話者はこの複雑な指示詞を、状況に応じて何の問題もなく使いこなすのである。

世界には 6 千を超える数の言語があり、10 日に 1 つ

のペースで消滅していると言われている。『危機言語』という標語のもとで消滅しそうな言語を記録したり、再活性化しようとしたりする試みが世界各地で行われている。しかし、仕事や教育で使われる言語を前に、なかなか再活性化しないのが現実である。エスキモー語も危機言語の 1 つであり、英語に圧倒されるなか、母語話者の数を激減させている。グローバル化のなかで、「言語なんて、2 つ、3 つでいいんじゃないかな」という言葉が聞こえてきそうである。

では、少数話者の言語を残すことにどんな意味があるのだろうか。各民族のアイデンティティを大切にしなければならない、という主張にも賛成であるし、植物の美しさがその多様性にあるように、人間の言語文化も多様性があるから素晴らしいのである、という考え方にも賛成である。もう 1 つ付け加えるなら、もし、例えば、エスキモー語が消滅してしまったら、空間を瞬時に 30 通りに区別できるという人間の潜在的な能力を知る手だてがなくなってしまうということが言えるだろう。近年、脳科学や認知科学が盛んであるが、遠近 (that/this) という 1 つの基準で人間の指示能力のポテンシャルを考えるのと、対象物への方向、距離、その状態を考慮に入れて人間のポテンシャルを考えるのでは、出来上がるモデルに大きな差が生じるように思える。少数民族の言語を大切にすることは、科学的にも、人類の進歩にも非常に重要なのである。

表紙写真
について

ヘルシンキの冬と夏 Winter and Summer in Helsinki

池野 修 Ikeno Osamu (愛媛大学)

フィンランドの首都ヘルシンキ市にて。フィンランドといえば、近年ではその学力の高さが注目を浴びている国であり、私もヘルシンキ大学やフィンランド教育省を 2 度訪れ、教育実習を中心とした教員養成についての調査を行った。左はヘルシンキ大学の Viikki 教員養成附属学校、右は世界文化遺産スオメンリナ要塞島において撮影した写真で、北欧の初冬と初夏を表すショットとなっている。北緯 60 度に位置するこの都市では、冬は日照時間が大変短い。私がヘルシンキを最初に訪れたのは 11 月初旬であるが、午後 4 時ころにはすでに日没を迎えていた。この時期にして最高気温マイナス 2 度という日もあり、暗く重厚なイメージをもつ街であった。しかし、2 度目の訪問となった 6 月のヘルシンキは、全く別の姿をしていた。「美しい夏」という形容詞がふさわしい気候で、夜 9 時を過ぎてもまだ明るく、街の中心部においても、多くの人々が街頭の道に面したカフェやバーで日光を楽しみながら過ごしているのが印象的であった。短い夏を大切に過ごすというのは学校教員も同じで、夏休みは実に約 2 か月間という、日本では考えられないような「ゆとり」のある生活である。

厳しい寒さを示す冬空の陰影と初夏のあざやかな青と緑。コントラストをなす 2 枚の写真であるが、両者に共通するのは「空気の透明感」。フィンランドのそれは格別であった。2009 年 11 月 (上) と 2010 年 6 月 (下)。